GIGAスクール 学校は今、どこへ向かっているのか

ICTで変わる学校の“いま”

1人1台のタブレット端末が配備され、授業にICTが取り入れられて5年。学校では、学び方そのものが少しずつ変わり始めています。

熊野小学校と山の田中学校での学びの様子を取材し、授業や学校生活の中でICTがどのように使われ、子どもたちや先生が何を感じているのか、学校の「いま」を見つめました。

● ICT整備状況

下関市立の小・中学校では、令和3年度に1人1台端末と電子黒板、Wi-Fi高速通信環境を整備しています。

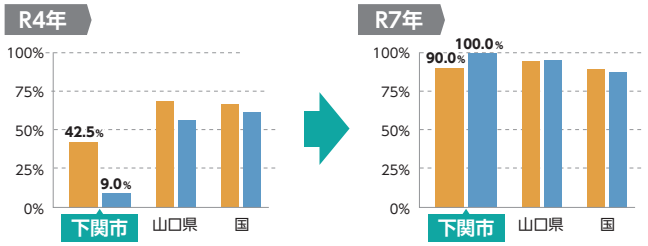
● 令和7年度 全国学力・学習状況調査から見る変化

小学校 中学校

下関市立の学校の“いま”を数字で見てみましょう。

❶ オンラインによる学習活動の充実

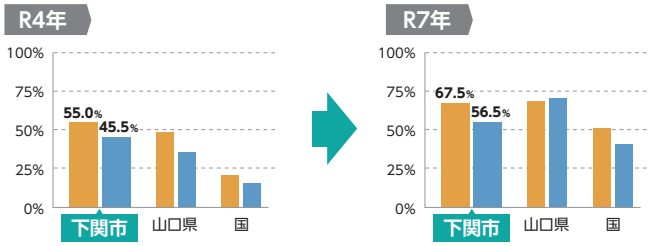
家庭に持ち帰ってタブレット端末を活用した学校の割合



※家庭に持ち帰り活用できる体制が整っています。

❷ 個別最適な学びの充実

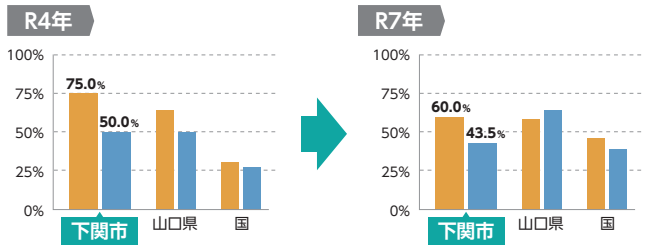
デジタル教材やアプリ等を活用した学校の割合



※自分のペースで学びが進められる環境が整ってきています。

❸ 協働的な学びの充実

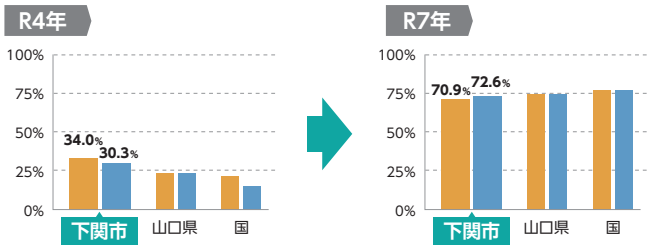
児童・生徒同士がやり取りする場面でICTを活用した学校の割合



※タブレット端末の活用が目的ではなく、必要な場面で効果的に活用されるようになりました。

❹ 探究的な学びの充実

ICT機器を使ってプレゼンテーションを作成できる児童・生徒の割合



※タブレット端末を活用したプレゼンテーションが授業の中で行われています。

GIGAスクールとは
令和元年から国が進めている「1人1台端末」と高速ネットワークを活用した学びの取り組み。

ICTとは（Information and Communication Technology：情報通信技術）
パソコンやタブレット端末、インターネットなどを活用して学びや仕事を支える技術のこと。

授業が変わった！
現場で見た“学びの変化”

探究や協働の学びを大切にしながら、
ICTの活用で、教室の学びの風景が
少しずつ変わり始めています。

協働的な学び

考えが集まると、学びが深まる

全員の意見が、瞬時に画面に表示される。考えが集まり、比べられるようになった。

みんなの意見をリアルタイムで見ることができるから、話し合いが広がる。意見がつながると、授業が動き出す。

個別最適な学び

分かるまで戻れる、自分のペースの学び

一人ひとりが、取り組む課題や進み方を選ぶことができる。

分からないところで立ち止まり、解説を見返しながら自分のペースで学び直せる。分かるまでじっくり取り組める。

誰一人取り残さない

つまずきに、早く気付ける教室へ

課題等の提出状況や学習の振り返りなど、タブレットを通じて共有される。

小さなつまずきに早く気付き、必要なタイミングで声を掛けられる環境が整っている。

熊野小学校 平野 和貴 教諭

ＩＣＴの活用で、子どもたち一人ひとりの考えが、以前より見えるようになりました。発表では、間違っているかもしれないと思うと手を挙げられない子もいますが、タブレット上で意見を出してもらうと、その子なりの考えが分かります。

友だちの意見を参考にしたり、少し自分の意見を変えてみたりする姿も多く見られます。まずは白紙でも出してみる、そこから考えがどう変わったかを共有する。そんな学びのプロセスが、自然に生まれるようになりました。

動画や資料も、一斉に同じものを見るのではなく、子どもが自分に合ったものを選んで学ぶ場面が増えています。理解のスピードはそれぞれ違いますが、並行して学習を進めることで、教師は一人ひとりに必要な声掛けができます。

表現する力が、教室の中で育っている。

考えを伝える方法は、一つだけではありません。
ICTの活用により、子どもたちの「伝えたい」が
さまざまな形で表れるようになっています。

発表・プレゼン

伝え方を選ぶこと。表現力。

口頭で、スライドで、動画で。得意な手段、内容に合った方法で学習成果を発表する。

みんなの前で発表するのは、ちょっと恥ずかしいもの。でも、自分の考えを文字でみんなと共有できるのは楽しい。

写真・動画で記録

記録し、振り返る。次の学びへ。

自分の動きを動画や写真で記録。ここができた、できていないを言語化することで、次の学びにつなげる。

どう改善するかを考える。自分の中で気付きを得る。成功への過程を、自分に伝える。

グループワークの可視化

話し合いの道筋が、見えてくる。

デジタルツールを使って、考え方がまとまっていく過程を見える化する。

話し合いの途中経過を共有することで、考えが深まる。

山の田中学校 2年 上田 莉緒 さん

タブレットを使うと、図やグラフ等で考えを分かりやすく伝えられます。以前は、発表した人の意見だけで考えていましたが、今はみんなの考えを比べられて、考えが深まります。書き足したり、直したりもしやすく、どう伝えるかを考えるのが楽しいです。

熊野小学校 5年 塚原 壮真 さん

Kahoot!やCanvaなどのアプリを使ってクイズを作ったり、動画で図形の動きを見たりすると、分かりやすくて楽しいです。発表は、少し緊張しますが、タブレットに意見を書く方法なら、安心して自分の考えを伝えられます。

GIGA SCHOOL @ Shimonoseki

先生の働き方も、少しずつ変わってきました。

先生たちも「学び方」をアップデートしています。

校務の効率化で、子どもたちと向き合う時間へ。

提出物のデジタル管理

提出状況を一覧で確認でき、声掛けがしやすくなった。

共有ドライブによる情報共有

教材や資料を共有し、先生同士の連携もスムーズに。

アプリ活用で生まれる時間

課題や小テストはデジタルで配布・回収・採点。準備や集計にかかる時間を節約し、子どもの理解度の把握もスピーディーに。

見えてきた課題、向き合い方

端末トラブルに備える体制づくり

トラブル時の対応や体制づくりは、教育委員会で強力にバックアップ。

情報モラルは、学びながら育てる

授業の中で使うことで、正しい使い方を学ぶ機会となっている。

教材づくりは、チームで支える

教材づくりは、研修や共有を重ねながら工夫している。

山の田中学校 岡﨑 峰之 教諭

授業中の待ち時間が大きく減り、生徒はそれぞれのペースで学習を進めています。教員も研修を重ねながら、新しい学び方を取り入れています。

山の田中学校 三奈木 彰人 教諭

デジタルの良さを生かしながら、授業に集中できる工夫を重ねています。

ICTは“特別な学び”ではない。日常を支える“文房具”へ。

教室の中で生まれた変化は、学校生活全体にも広がっています。

授業以外の場面でも、子どもたちを支えている

ＩＣＴの活用は、学校生活のさまざまな場面に広がっています。例えば「3年生を送る会」では、後輩たちがメッセージ動画を制作し、感謝の思いを伝えます。文化祭では、プロジェクションマッピングの花のつくり方を説明する動画の編集を子どもたち自身が担い、委員会活動でも資料作成や情報共有にタブレットを活用しています。準備や振り返り、記録がしやすくなり、行事や学校生活の中で、一人ひとりが役割を持って関われる場面が増えていることを実感しています。

山の田中学校
国生 梢 教諭

一人ひとりにあったカタチで、学びを支える

支援が必要な場面等では、字を書くことに時間がかかったり、説明文を読むことが難しかったりして、本来の学習のねらいがぼやけてしまうことがあります。タブレットは、イラストや記号を動かして考えを表したり、選択肢から答えたりと、取り組み方法を選べるツールです。デジタル教材は、ルビ表示や読み上げ機能があり、理解を助け、本来の学習のねらいに集中できます。多様な学び方を用意することが、学びを止めない環境づくりにつながっています。

山の田中学校
山﨑 恵美 教諭

学びを支える、学校の舞台裏

学校でのＩＣＴ活用を支えるため、教育委員会では、環境と体制の整備を進めています。

タブレットを家庭に持ち帰り、自学やオンライン学習に活用できるよう、貸し出し用のモバイルルーターを整備。学校と家庭、児童・生徒と学びをつなぐ体制を整えています。

また、ＩＣＴヘルプデスクを設置しており、機器の不具合や操作に関する相談にも対応。教員向けの研修も重ねながら、学校の取り組みを後押ししています。

下関市教育委員会 教育研修課
大貝 浩蔵 主査

未来の学びへの橋渡し

―考える力を育てる。生成AIとの付き合い方―

答えを教えない生成AIが、考える学びを支える

令和7年度から、下関市の公立中学校は、生成AIを活用した学習アシスタントアプリ「スタディポケット」を導入しています。山の田中学校では、英語の授業でアプリが提示する英文を読み、要約して英作文で表現する「リテリング」に活用。アプリがその場で添削し、教員がいくつかの添削結果を紹介して学びを深めていました。直接答えを教えない仕組みとなっており、考える力を育てる学びにつながっています。

山の田中学校 3年 林 咲十 さん

もう一人先生が増えたみたいです。分からないところをすぐに聞けて、説明も分かりやすい。いろいろな表現の仕方を教えてくれるので、英作文を書くのが楽しくなりました。

山の田中学校 3年 加藤 源太朗 さん

数学では、生成ＡＩが作ったドリル問題を解いて、そのまま答え合わせができます。ポイントを押さえたヒントをくれるので、自分のペースで学習できて助かっています。

山の田中学校 伊村 純江 教諭

１人の教員が、それぞれの生徒に合った課題を毎回用意するのは簡単ではありませんが、「スタディポケット」は一人ひとりに応じた課題を提示してくれます。生徒は自分で考え、添削結果をもとにやり直しを重ねます。その過程を教員が把握できるため、それぞれが自分の学びに向き合う教室が生まれていると感じています。

学校は未来を見据えている！

学びの道具は変わっても、学びの真ん中にいるのは、いつも子どもたち